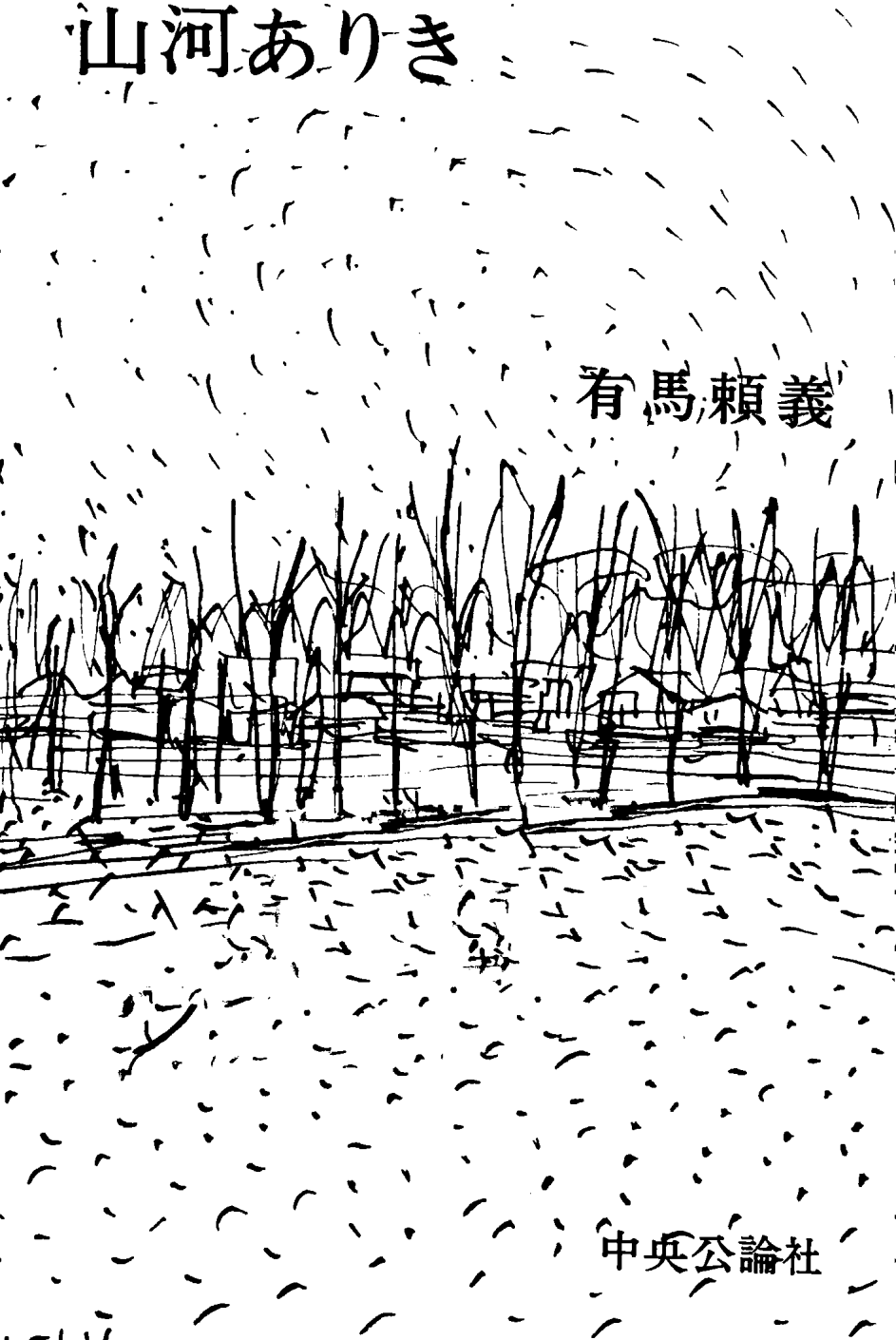
山河ありき

有馬頼義



中央公論社

山河ありき

© 1962
検印廃止

著 者 有馬頼義

昭和37年10月5日初版印刷
昭和37年10月10日初版発行

発行者 宮本信太郎
印 刷 三 陽 社

発行所 中央公論社
東京都中央区京橋2の1
電話 (561) 5921—30
振替 東京 34

定価 390円

山河ありき　目次

ぶらぶら 7
重臣密会 22
一九四一年夏 37
灰色の日日 57
寺と土塀の古い町 72
油照り 90
山火事 107
野犬狩り 125
秋 136
苦い杯 146

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冷たい心　158
末期症状　175
赤い夜　203
夏草　221
青年自由党始末　242
共犯者　259
一人二役　272
あとがき　289

装幀　石川滋彦

山河ありき

ぶらぶら

一

紀年が、足掛け七年ぶりで、荻窪の対島家へかえって来たのは、昭和十九年の三月の末であった。その時紀年が持って帰ったのは、数冊の書物と、一本の万年筆と、古ぼけた一枚の表札だけで、家を離れていた七年間、彼の日常の中にあった荷物は、全部女の家へ残した。女はその時、泣きはしなかった。紀年も「じゃ、さよなら」とだけ言って女の家の玄関を出た。もはや二人の間には、それだけのものしか残っていなかったようである。七年前に、一つの情事がはじまり、終ったのだ。それは最初からそういう結末を予想出来た。その予想が七年間紀年を苦しめつづけたと言えないことはない。紀年は、その未来の暗さに負けたのだ。それだけの話である。

紀年は、一人になった。広い庭に咲いているぼけとこぶしと連翹が、陽当りのいい紀年の部屋の窓から見えた。一家がそこに居ついてから二十年の歳月を彩って来たものだ。

女は、芸者であった。女は、紀年と別れると、陸軍大臣の官邸の女中に、住み込んで行くことになっていた。それは、結婚よりも、はるかに確かな就職に見えた。その就職を加算して、女との収支は零であった。紀年が、この部屋

で、まずしなければならないのは、忘れることだ。紀年は、小説を書きはじめた。その最初の部分は、裏町の、十二円の家賃の家の、ぐらぐらする炬燵の上で、既に書きはじめられていたが、紀年は、その続きを、陽当りのいい静かな一人きりの部屋で書くことの痛みに耐えようと考えていた。

その部屋の窓から、古い欅と樫と杉の森が見えた。その欅や杉は、大正元年に、紀年の父の紀泰がここに土地を買った時から、うっそうと茂っていた。坪五十銭の土地を、紀泰は一万二千坪買った。大正の終りまで其処は森林と農園であった。その片隅に小さな家があって、夏になると、一家はそこに逗留した。大正の終り頃、電車はまだ中野までしかなく汽車にのりかえて、荻窪まで来た。阿佐ヶ谷も、高円寺も西荻窪も、まだ駅がなかった。昭和二年に、江戸時代の下屋敷であった浅草の家を売って、一家は移住した。建坪二百六十坪という家は、その時建てたままだが、土地は、昭和八年に、東側を分譲して、五千三百坪になった。

欅の森と建物の間に、八百坪あまりの芝生があった。そこが今は、半分畑になっている。紀年が留守をしていた七年の間に、雇われた青井虎次郎という農夫の手で耕された。ほかに、何もかわったことは見つからなかった。紀年は半日、窓際に佇んで、窓の外を眺めたりした。しかし、七年という歳月は、紀泰と母の佐喜子の白い髪にだけ訪れたのではない。七年前、その家には、一日中客があった。大勢の人間が、其処で働いていた。建物の隅々まで、活気があった。しかし今は、そうではない。あるじは紀泰と佐喜子と紀年の三人きりだし、使われている人間も、渋谷という、古い刑事上りの老人と、紀年の乳母であったもよという老婆と、二十年の昔風な邸奉公で飼い馴らされたかねという中年の女中の六人。それだけが二百六十坪の古い建物の住人であった。昼間でも、物音一つしない。

紀年がかえって来る少し前、この古い家に泥棒がはいって、箪笥三棹の中身をすっかり持ち出した。

「三日位続けてはいっていますね。泊り込みだったかも知れない」と刑事は笑った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

紀泰が、いつ頃青井虎次郎という男を雇ったのか、紀年は知らない。紀年がこの家へ戻って来たとき、虎次郎は、建物の裏手の桜の古木の下の小さな小屋に住んでいた。

虎次郎は、平凡な男であった。小柄だが、力はあった。器用な男で、畑仕事のほかに、大工も植木屋もやり、走り使いもした。彼が訥弁であることの埋め合わせのように、細君はよくしゃべった。小学校六年生の男の子があったが、それは虎次郎の子ではない。虎次郎は今、酒は一滴ものまないが、昔は酒呑みであった。呑むと酒癖が悪かった。土地の者は虎次郎をおそれた。彼は朝から酒をのんでいた。彼があらわれると、町の飲み屋は、「虎が来た、虎が来た」と言って表を閉めた。今の細君だけが、対等に虎次郎とはり合ったそうである。虎次郎の方が負けたのかも知れない。それで、虎次郎は、こぶつきの女をもらったのだ。

妙なことに、結婚すると、虎次郎は、酒をやめた。それが信用出来ると見極めてから、彼を世話する棟梁があった。虎次郎は、対島家の雇人になった。

紀年が戻って来てから半月もたった頃、その虎次郎が、芝生の上で、妙なことをしていた。め竹の切ったのを芝生に立て、縄をつかって、芝生の上に円を画いているのだ。紀年は庭へおりて行った。

「何をしているんだ」

「あのね」と虎次郎は言いかけてから「こんちわ」と挨拶をした。

「何がはじまるんだ」

「タコ壺を掘るんですって。町内で」と虎次郎の言い方は、子供じみている。「空襲があるでしょう。だから掘り方を教えて、早く掘る競争をするんですって」

「誰が？」
「隣組ごとに、選手を出してね。この組は、あたしが選手です」
「へえ」と紀年は様子を察した。「誰が出てもいいのかい？」
「どの組も、植木屋とか、鳶とかが出るね。あたしは昔、井戸掘りをやっていたから」
「俺にやらせないか」
「……」
虎次郎はびっくりした。
「若旦那、掘れますか」
「掘れるさ」
「直径三尺、深さ六尺ですよ」
「掘れる」
「じゃあ、かわりましょう」と虎次郎は、案外あっさり承諾した。
虎次郎は、直径三尺の円を五つ描き、そこだけ芝生をはがした。そして奇妙な穴掘り競争は、午後、町会長の立会で開始された。
見るからに岩乗そうな男が、四人来た。紀年は見すぼらしく見えた。しかし年齢は、紀年が一番若い。仕事師達の若いのは、殆ど軍隊へ行っているからに違いなかった。
紀年がこの馬鹿々々しい穴掘り競争に出る気になったのには、理由があった。力だけで勝負のつくものに熱中してみたかったのだ。それに、紀年の兵役は、三年三月殆ど、毎日、穴掘りに終始した。紀年の入隊した第一師団は、昭和十一年に満州へ追放された。当時まだ治安のよくなかった東辺道から、討伐の旅をつづけて、昭和十三年に、黒河の北にある法別拉という山中にたどりつき、其処に陣地を構築した。紀年が入隊してすぐに送られて行ったのは、そ

の未完成の陣地であった。陣地は、紀年がつとめたはじめの二年で完成した。掌から何度も血を吹いた。その皮膚は、またやわらかくなっていたが、紀年は、自分をせめてみたいと思った。

穴掘り競争の用具は、シャベルだけであった。紀年は、普通のシャベルの他に、柄の少し短いのを、虎次郎に用意させた。

黒い土は、地表から一尺余りしかなく、それから下は、かたい赤土であった。掘るのに骨は折れたが、崩れる心配はなかった。競技者のからだは、だんだん穴の中へかくれ、規則的にほうり上げられる土くれが、五つの穴から飛び出した。それはだんだん量がへった。穴が四尺に達したとき、ほうり上げられる土は、シャベルの半分しかなく、その半分がまた穴の中へ落ちたりした。二時間経っても勝負はつかなかった。

穴の中で、汗が目にしみた。掌のまめの皮はむけ、そこに泥がつまった。膝ががくがくした。

「短いのをくれ」と紀年は、心配そうに穴をのぞいている虎次郎に言った。虎次郎はシャベルをおろし

「勝ってる、勝ってる」と笑った。紀年の頭の中に、その時何もなかった。紀年は、掘りつづけた。

六尺の紐を上からたらしていた虎次郎が、妙な喚声をあげて、町会長を呼んだとき、紀年は、もうへたばる寸前だった。虎次郎が、紀年を、穴の中からひっぱり上げてくれた。

「俺にも井戸が掘れるか」と紀年はきいた。

「掘れる、掘れる。一人前だ」と虎次郎は嬉しそうに笑った。

賞品の酒一升は、虎次郎にやった。虎次郎は恐縮して

「何か、あたしに出来ることがあったら、言いつけて下さい」と言った。

紀年はしかし、自分のために、それをやったのだ。掌のまめのあとは、十日位あとまで痛んだ。

三

再び、為すこともない日常が、紀年にかえって来た。穴掘り競争の刺戟は、筋肉の痛みと一緒にそれが去ってから、かえって空虚感を残した。小説を書くことは、過去をもう一度生きることであり、今の紀年の立場を有利にはしなかった。

つまり、何もしないで毎日無為に暮していることに、どんな意義があったか。意義の必要な世の中であった。それも、人の目に見えるものでなければならないのだ。紀年の部屋には、世間の風は吹いて来ない。誰も紀年を気にしてはいなかった。それは隠棲のようなものであった。しかし紀年には、隠棲を正当化する過去の業績はない。あるとすれば、それは未来にある筈であった。

紀年は、軍隊から戻ると、新聞記者になった。しかしその時代の新聞記者に、どれ程の仕事があっただろうか。彼は河岸へ行って魚の入荷を調べた。菓子組合から、都民へ、餅菓子一個当りを配給する、という電話がかかった。学生達が、卒業をくり上げて入隊した。そういう記事を書くのが、社会部記者の仕事であった。

「対島君」とある日デスクの大賀さんが呼んだ。「弾丸切手のことを少し調べてみてくれないかね」

「はあ」と答えて紀年は逓信省へ通いはじめた。弾丸切手というのは、昔の富籤や、戦後の宝くじと同じものである。一枚、二円だった。戦争には金がかかった。その二円を、砲弾の製造につぎ込むというのが大義名分である。一年間に八千八百五十万枚、当時の金で一億七千七百万円を売上げた。この中に一等千円、二等百円、三等十円の当り籤があった。ところが、逓信省に通って調べているうちに、紀年は、一等当り籤の賞金をとりに来ないのが一年間に百二十三人あることを発見した。少なくない金額である。その金は一年経つと国庫へ回収されてしまう。当り籤発表の方法を究明してみると、抽せんの翌日の新聞三面の片隅に一回、各郵便局前に立札を一日出すだけだ。紀年は少しばか

りの情熱を感じた。それは奇妙な情熱であった。そして彼は二日かかって、逓信省が、当せん番号の発表を、あまりに簡単に、小さくしかしていないという点を攻撃した記事を書いた。紀年にはそのやり方が、詐欺のように見えたのだ。

その記事は、全国の新聞に掲った。しかし活字になったそれは、紀年が書いたものと、かなり違っていた。受取人のない賞金が、一年後には国庫へ回収されるというところが削ってあり、最後の数行は「一等当せんの賞金をとりに来ないというのも、要するに、戦地へ弾丸を送りたいという、熱意の不足であろう」という風に理窟に合わない文章に直されていた。

紀年の記事に朱を入れたのは、デスクの大賀さんだったかも知れないし、整理部であったかも知れない。その訂正された記事からも、弾丸切手のあり方に疑問を持った人があったのだ。緊急会議のあとで、大賀さんが、編集局長に呼ばれ、二人で逓信省へ行った。

「お前の書いた記事のことで、お目玉を喰ったんだよ。二人であやまりに行ったんだぜ」と社内の消息通が、紀年に囁いた。紀年はしかし、夕方戻って来た大賀次長に何も言わなかったし、大賀さんも何も言わなかった。しかし部長に呼ばれて、大賀に挨拶しておけ、大賀が責任を負ったんだ、と言われた。紀年が大賀さんの処へ行くと、大賀さんは先に手を振って

「わかってる。もうすんだんだ」と言った。

紀年はそれから間もなく新聞社をやめた。大賀さんが北京へ行ったということを、ずっと後になって聞いた。

新聞社をやめたことは、収入の道が無くなることであり、収入の道が無くなることは、女と一緒に暮して行けないことであった。紀年は、非戦論とか反戦論とかいう風な根拠を持っていたのではない。ただ、人間は、自分を殺すことによってパンを得るか、自分を生かすことによってパンを得るか、二つに一つの生き方しか出来ないのだと思った。自分を生かすことによって生活したい。しかし、一億の日本人の何パーセントが、それに成功しているだろうか。紀

年が女と別れて、父母の希望通り家へ帰ったのは、妥協であった。妥協には呵責が続いた。しかしまだ、自分を生かす可能性は残っていたように見えた。

桃が咲き、桜がほころびる頃、小説は五百枚を越えたが、それを活字にするあては全くなかった。

四月二十三日に近松秋江が死んだ。新聞にはこう書いてあった。

近松秋江氏。二十三日午前十時杉並区東田町の自宅で死去。氏は岡山県和気郡藤乃村の出身、明治三十四年早大文科卒、文壇に特異な作風と政治好きで知られ、代表作に「天保政談水野越前守」「三国干渉の突来」などあり、昭和十三年六月来両眼を失明、不遇の生活にあった。

「別れた妻に送る手紙」「黒髪」「子の愛の為に」などを、遺した人とは別人のように見えた。しかし秋江が、自分を殺して生きてきた人でないことを、紀年は知っていた。

厳しい出版統制の中で、僅かな数の雑誌が細々と続いていたが、広告を一目見れば、読まなくても内容がわかった。

日の出（五月号、四十銭）末次海軍大将に現戦局を訊く、岩田豊雄。富士（五月号、四十銭）戦局を肚で見よ、秋山中佐。さつま諸増産手引。小説御盾、山岡荘八。高杉晋作、尾崎士郎。新太陽（五月号、四十銭）海員魂、寒川光太郎。陸軍中佐多田礼吉、訊く人、中野実。中央公論（五月号、七十銭）総力戦への国民的認識。日米決戦と世界戦局。日本海海戦誌。文芸春秋（五月号、四十銭）東北二十三度、丹羽文雄。頭と形（軍隊手帖）火野葦平。海軍歩兵（戦記）久生十蘭。疎開する文学者に、結城哀草果。

紀年は、やはり自分の深いところに、絶望がうずくまっているのを感じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com